

# 家庭科

## 潤いのある生活を求め、創り出す子供の育成

～できる喜びと人や生活とのつながりから、実践意欲を高める授業の展開～

家庭科では実践的・体験的活動や家庭とのつながりを大切に授業を進めてきました。実践的・体験的活動からは「できた」「分かった」と目を輝かす子供たちと出会うことができました。また、家庭での様子を见たり聞いたりしてくると、その様子を生き生きと話す子供たちの姿がありました。そこで、その子供たちの思いを大切にしながら、確実な力をつけて「今度、家でやってみよう」という実践意欲につなげたいと思い研究してきました。

(家庭科主任 石渡 美穂)



### 1 研究の方向

#### (1) 研究の経緯

家庭科は家庭生活を主な学習対象としているため、学習自体が子供の家庭生活と密接に関連している教科である。しかし、家庭での手伝いが減ったり、生活経験が乏しくなってきたりしている実態を考えると、基礎的な技能を確実なものにすることや子供が学習した内容を自分自身の生活のこととしてとらえること、さらに子供が学習したことを生活に生かそうとする意欲を高めることが課題とされている。また、深刻化している環境問題に対して、家庭科における今後の環境教育、消費者教育のより一層の充実が求められている。

1年次の研究では「ものの見方を工夫し、やってみることを楽しむ授業の構想」を副主題として、次のような研究を進めてきた。

- (1) 自分と家庭生活、自分とものとのかわりを生かした題材展開の工夫
- (2) ものを多様に見つめる視点を生かし、活用する力を育む学習活動の工夫

研究の成果としては、実践的・体験的な活動を通して、たくさんのものに触れて自ら考えることを繰り返したことで、主体的に活動しながら、ものの価値や特徴を感じられたことがあげられる。また、家庭で見聞きしてきたことを生かしながら、学校での学習を進めていくことで、授業での学習意欲の高まりが見られた。課題としては、ものに触れながら自ら考える実践的・体験的活動を生かして、基礎的・基本的な知識や技能についても、子供たち自身が考え納得した上で、身に付けられるような工夫が必要であることを感じた。また、子供たち自身が学習の積み重ねを意識していけるような授業や題材展開の工夫を図っていく必要も感じた。

#### (2) 研究副主題の設定

上記のことから、本年度はできる喜びと人や生活とのつながりを大切にしたい家庭科の学びをもとに、よりよい家庭生活に向けて自ら行動しようとする子供の育成を中心にすえて研究を進め、子供たちが学習したことを自分の生活に生かそうとする意欲を高めていきたいと考えた。

そこで、研究副主題を「できる喜びと人や生活とのつながりから、実践意欲を高める授業の展開」とした。家庭科での学びを確かなものとして積み重ね自信を持てるようにしたり、家族や生活とのつながりの機会や方法を工夫して家族の思いに触れられるようにしたり、家庭科の学びが家庭生活の様々な場面で生かせることを実感できるようにしたりしていく。そのことで、実践的な態度を育てていきたいと考えた。そのために、以下の2点を研究の柱として研究を進めていくこととした。

- (1) 家庭科の学びを積み重ね、自信をつける学習活動の在り方
- (2) 家族や生活とのつながりを深め、実践意欲を高める支援

## 2 研究の内容

### (1) 家庭科の学びを積み重ね、自信をつける学習活動の在り方

学校で学んだ家庭科の学習内容を子供たちが自信を持って家庭生活に生かすためには、一人一人ができるようになったり、分かるようになったりしたことを自覚することが大切である。

そこで、生活の中で起きていることを実感を伴って理解していけるような実践的・体験的な活動を導入し、その活動から気付いたこと等を書き留める活動を取り入れることを考えた。このことで基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図り、子供たち一人一人に家庭科の授業の中で得た「できた」「分かった」という経験を確かなものとして積み重ね、自信を持って自分の生活に生かしていくことができるようにしていきたい。

#### ア 基礎的・基本的な知識・技能の定着を図り、生活を工夫する力を養う実践的・体験的活動の導入

以前より子供たちの生活経験の不足が指摘され、これまでもそれを意識して実践的・体験的活動を多く導入し、実感を伴った学習の工夫について研究してきた。ものに触れ、五感を働かせて知り得た情報は子供たちの印象に強く残り、その後の学習や生活に生かす様子が見られた。そのため、今後も継続して実践的・体験的なよさについての研究を進めることにした。

本年度は、さらに基礎的・基本的な知識・技能を身に付けることを中心に、家事を進める中で起きている現象や状態等の一つ一つを子供たち自身が実際に経験し、納得して理解できるような実践的・体験的な活動を工夫し導入していきたいと考えた。そのために、子供たちの学べき内容が明確になるような活動の場を設定するようにした。その活動から感覚的にとらえたことをもとにして整理し、理解につなげていく。そして、それらのことをもとに「なぜ、そのようにするのか。」「なぜ、そのようにすることがよいのか。」等の理由について考える場と時間を確保することで、生活を工夫する力を養っていくようにしたい。また、題材の中で実践的・体験的活動の内容を基礎的なものから応用的なものへ、部分的なものから全体的なものへと段階的に配列することで、必要な知識・技能を無理なく定着していけるようにしていく。

これらのことを繰り返すことで基礎的・基本的な知識・技能の定着を図り、よりよい生活を追求していく実践力の基礎を築きたい。

#### 実践例【めざせ！洗たく名人（6年）】

手洗いを一連の手順で試行したことによって得た課題をもとに体験的学習の場を設けた。一連の流れの中から洗い方やすすぎ方等を取り上げ、正しい洗い方等について子供たちが主体的に体験的活動に取り組み、実感を伴って考え、理解していけるようにした。



4つの洗い方の体験的活動の後に、靴下の特徴を考え、どの洗い方が靴下には適するのかを話し合っている様子。

#### 体験活動のプリント例

(1) それぞれの洗い方をした時の、くつ下の汚れの落ち具合や気付いたことをメモしよう。

洗い方	【メモ】汚れの落ち具合・気付いたこと など
もみ洗い	・水が何回も出る　・手と小指が動く時と良い ・水の中に入れて洗った方が良さそう　・水が、汚れた ・洗って洗って汚れたが落ちそう　・長く洗う
ふり洗い	・汚れが全くとぎっていい程落ちた ・表面の汚れが落ちた ・洗った音がきこえる
つかみ洗い	・表面は綺麗　・汚れたが落ちた ・汚れたが落ちた
おし洗い	・ふり洗いよりは汚れが落ちる ・洗った感じがいい ・汚れが落ちた

#### イ 体験からの気づきを生かす学習活動の工夫

子供たちは説明等を聞くより、自分自身が体験した方が多くのことに気付く。そして、そのことを自分の言葉で話したり、書いたりすることでより確かな記憶となり、自信につながっていく。このことは実践的・体験的な活動を多く取り入れて進める家庭科の学習において大いに生かしていけるものである。

題材中での観察や実験、実習等の場面において、分かっているつもりで分かっていたなかったことに気付いたり、活動していくうちに自然に身に付いたりすることがたくさんある。それらのことを自分の言葉で書き留めたり、うまくいかなかったことを明らかにしたりしておく。そ

して、一人一人が見つけたよりよい方法を互いに共有できる場を学習内容に応じて工夫して取り入れる。その中で、自分が見つけたよりよい方法を再び授業等で生かしたり、友達の言葉によって整理されたよりよい方法を試したりしていく。これらのことを取り入れながら、うまくいく体験を繰り返すことで一人一人の基礎的・基本的な技能の向上を図っていき、自信を持てるようにしていきたい。

また、授業の振り返りの際には、目標に合わせて観点を細分化したワークシート等を使うことで、何を学んだのか、何ができるようになったのかを子供たち自身が感じられるようにする。技能に関しては見本教材と比べながら自己評価する等の工夫をすることで客観的に自分の力を知ることができるようにする。このようにすることで、うまくいったことに自信を持ち、うまくいっていないことは自分の課題として、よりよいものを求めていけるようにする。

**実践例【わたしの手にまほうをかけて（5年）】**

<p>＜できた時の感想＞</p> <p>初めて自分で作った作品ができてうれしかった。本返しの縫い目は白のはりこうまてと縫った。なみぬいがかがたがたしてしまっただけで、大からではさむようにした。</p>	<p>玉留め (A B C) 玉止め (A B C)</p> <p>なみぬい (A B C) カガリぬい (A B C)</p> <p>本返しの縫い (A B C) 縫い (A B C)</p>	<p>フェルトに並縫いと本返し縫いでデザインしたコースターを作った際の振り返りである。関心、工夫、技能の各項目に合わせて、振り返りの欄を設けることで、自分が学んだことを具体的に捉えることができるようにした。</p>
<p>＜うまくできたこと＞</p> <p>○フェルトの色と糸の色→糸の色を使い分けたので、自分の色に合った。○名前・顔・線のデザイン→フェルトの色に合った。○縫い目をきつめに縫った。</p>	<p>玉留め (A B C) カガリぬい (A B C)</p> <p>なみぬい (A B C) 玉止め (A B C)</p> <p>本返しの縫い (A B C) 縫い (A B C)</p>	<p>コースターに続いて、2枚重ねでマスコット作りをした時の同じ児童の振り返りである。同じ形式で振り返りを行うことで、1作目と2作目の振り返りを比べられるように工夫し、子供自身が上達を感じられるようにした。</p>
<p>＜できた時の感想＞</p> <p>短い時間だったけれど、できてよかった。このマスコット、何に使おうかな？早くお家の人にみせたい!! この前のコースターよりも、ずいぶんうまくなったなあ。</p>	<p>玉留め (A B C) カガリぬい (A B C)</p> <p>なみぬい (A B C) 玉止め (A B C)</p> <p>本返しの縫い (A B C) 縫い (A B C)</p>	
<p>＜うまくできたこと＞</p> <p>内側の縫い目をめうとき、なみぬいを使い分けて縫った。縫い目がずれないようにした。インシヤレの縫い目と、縫い目を合体させた。</p>	<p>玉留め (A B C) カガリぬい (A B C)</p> <p>なみぬい (A B C) 玉止め (A B C)</p> <p>本返しの縫い (A B C) 縫い (A B C)</p>	

## (2) 家族や生活とのつながりを深め、実践意欲を高める支援

家庭科の学習内容が自分の生活と直結していることから、家庭で行われていることを授業に生かしたり、学校での学びを生活に生かしたりしていくことが有効であり、必要であると考え。

そこで、最初に家族が家庭で行っていることに目を向け、その後の学校の学びから家族のやり方の工夫や思いに気付けるようにしながら学習を進めたり、学習を通して学校での学びが生活の様々な場面に生かされることに気付けるような活動を取り入れたりすることを考えた。これらのことで、家族が生活のために行っていることや生活の多くの場面に目を向けられるようにし、家庭科の学びを生かせる場面に気付くことで意欲を持って実践できるようにしていきたい。

### ア 家族とのつながりを生かした題材展開の工夫

子供たちは、家庭で生活のために行われている事柄にあまり意識を向けていないことが多い。しかし、きっかけを与えられると意欲的に取材等に取り組む子供たちの姿に出会う。昨年度は学習の対象となる家庭生活に目を向けられるように、家庭で見たり聞いたりしてくるような機会を題材中に複数回作るようにしてきた。そして、家庭での取材や調べたことを課題作りに生かしたり、多様なものや方法があることを知る手立てとしたりしてきた。

今年度は、さらに題材導入時に家族の様子を見たり、家族から話を聞いたりしたことから「どうしてそうするのか」を一人一人が考えたり、その内容を学校で共通体験の場として設定した試行等の活動に生かしたりすることを考えた。その後、学校での学びを整理する時間と場を確保していく。その活動を通して、家庭ならではの方法があることに気付いたり、その方法を取り入れている理由について考えたりすることによって、家庭生活に再び目を向けられるようにする。その中で、家庭の仕事やそれに携わっている人の考え方や気持ちにも気付くようにしていきたい。

また、実習や製作においては随時、自分ができるようになったことを家族に伝え、学校での学習内容や身に付けた力について話題にする機会を増やしていく。それを繰り返した上で、家庭

実践等では家族の思いや考えを聞いてから計画を立てることで、学校での学びを生かした実践につなげたり、家族に合わせた方法や活用法を取り入れたりとできるようにすることを考えた。

#### 実践例【わたしの手にまほうをかけて（5年）】

家の人や友達に話を聞いたり、道具を見せてもらったりして感じたことや考えたことを書いてみましょう。

このものはすぐ見つけられるけど手縫いの物は、あんなに見つけられないことにびっくりしました。手縫いのものは、お母さんが私が知らず知らずのうちに、だれか何かを作ってくれていてうれしかった。でも、ちゃんちゃんこは、今でも着ているので、使えて、手作りはいいいな、と思った。王様境にもいいと思います。手縫いで一針一針、時間をかけて、ぬってくれたものは、あんなにいいです。

家の人や友達に話を聞いたり、道具を見せてもらったりして感じたことや考えたことを書いてみましょう。

手縫いの物を家の机で縫うとしてもあまりはかたけれど、生活ではわたしの着ている以上に使うことができることを知っておどろいた。又、家の人と縫った物の中で手縫いの物を縫うとした。これもあまりはかたなので、今は何でも縫い会で作っているんだ、と思って、少しがっかりした。手縫いのものは、これから生活で手縫いを生かしていきたい。

題材導入時に家にあるものを見たり、家族から話を聞いてきたりする活動を通して、子供が感じたことや考えたことを記入する欄を設けた。この欄には「家族への感謝」や「ものの大切さ」「手作りのよさ」など多くのことが書かれていた。家族とのコミュニケーションが図れたことから、大きな気づきがあったことが分かった。

#### 実践例【めざせ！洗たく名人（6年）】

(3) 今日の学習から家の人や友達がやっていた手洗いについて分かったことや思ったことを書く。

家の人や友達に話を聞いたり、道具を見せてもらったりして感じたことや考えたことを書いてみましょう。

家族が手洗いしている様子を見たことと、自分が学校で学んだことをつなげて考えている例である。家族がその方法を取り入れている理由が分かることで、家庭で行われている一つ一つのことへの見方が変わっていくと考えた。

### イ 家庭科の学びと生活とのつながりを考える場の工夫

子供たちは学校で学習したことが生活に生きていることに気付けば、さらに学習の必要性を感じることができる。家庭生活を学習の対象としている家庭科では、生活との結びつきを感じられることがたくさんある。それを子供自身が意識していければ、学習意欲が高まったり実践的な態度につながったりすることが期待できると考えた。

そこで、題材の開始時にアンケートに答えたり、家族に取材したりする活動を通して、これから学習する内容は生活のどのような場で使われているかを知るところから学習を始めるようにした。

そして、題材を通してそれぞれの授業の中で今日の学習は生活にどのように生かすことができるかを考える場を設定をする。この活動を繰り返すことで、調理やそうじ等の家庭実践に限らず、味わう、選ぶ、使う等の様々な場面で日常的に学びを生かせることを意識できるようにし、自分で考えながら生活することの大切さに気付くようにした。さらに題材終了後に実践期間を設けて、各題材の実践についての内容をアンケートで問うたり、報告会をしたりすることを通して、子供たちに家庭科の学びと生活とのつながりを意識させた。

#### 実践例

##### 【日本の味「ごはんとみそ汁」を作ろう（5年）】

「日本の味「みそ汁」を作ろう」

「回作って、少しむずかしいと思ったので、じゃがいもの皮を剥いて、残りの皮は悪いな」と思い、みそ汁を残さず食べようと思った。

題材終了後、しばらく時間を空けてからとったアンケートの解答例である。家庭科の学習は調理実践等以外にも広く生活に生かされていくことを子供たち自身が考え気付いていくことができた。他にも「みそ汁を食べる時にみそやだしの種類を気にするようになった」等、具体的な場面をあげている子供が多く見られた。

### 3 成果と課題

ねらいを明確にした実践的・体験的活動と互いの気づきを生かす場を確保したことによって、授業の焦点化が図れ、子供たちが考えるべきことをしっかり考えることができた。また、体験の繰り返しと家族からの情報や賞賛等から、子供たちが自信を持って活動する姿があった。今後は学校と家庭のよりよい連携の仕方について研究し、学校の学びと家庭での実践がスムーズにつながるようにしていきたい。